事例３　　単元「まとまりに気をつけて読もう　～ありの行列～」

まとまりに気をつけて読もう

国語　第３学年

津幡町立太白台小学校

１　事例の概要

文をすらすらと読める子は多いが、登場人物の気持ちを文の言葉から想像して言える子は、限られている。自分の意見を発表する際、間違えたら恥ずかしい、わからないのは恥ずかしいと思っている子が多い。それも、想像したことを自由に言えない原因になっているのかもしれない。積極的に発言する子は数人で、わかりやすく話したり声の大きさを考えたりして話せないので、聴く子も反応したり集中して聴くということができない。４月から「反応しよう」「同じか違うか考えながら聴こう」と声かけはしているが、友達の話がわかったのか、どのように思ったのか表情にも出ない子がほとんどなので、広めたり深めたりするための手立てを探っている。

そこで、文に書かれている言葉を正しく読むことを大切にし、何が書かれているか本文に戻って考えるようにする。そのためにも、音読を多く取り入れ、接続語の意味や指示語のさす言葉や文を考えながら読み進めていこうと考えた。接続語の意味や指示語のさす言葉や文を考えながら読み進めていくことが、次に説明文を読み取っていく力となっていくだろうと考えられる。そして、視覚に訴えたり、言葉の意味を考えさせたりしながら、読み進めていくようにする。

Ａ－１ 学校研究の概要　Ａ－２ 構想図　Ａ－３ 活用力向上への取組　Ａ－４ 活用力

２　実践内容

⑴　単元の目標

・書かれている事柄に興味・関心をもち、また、「段落」「接続語」「文末」などに着目して文章を分析的に読むことを楽しんでいる。（国語への関心・意欲・態度）

・「問い」と「答え」、段落ごとの要点を正しくつかみ、叙述に即してありの行列ができるわけを理解することができる。（読むこと）

・指示語・接続語や文末表現に注意して読み、段落の役割を理解することができる。（言語についての知識・理解・技能）

⑵　指導上の工夫点

① 意欲を持って追求したくなるような課題の設定

・課題について興味をもって考えられるようにするために、ウイルソンのしたことを黒板に絵で表したり、「問い」を意識させたり、課題意識を強めたりするために、「ありは行列を作ったか」と問いかける。

② 考えも持つための支援

・言葉や文に目が向くように、段落番号や文番号をつけ、考えを持つ段階では、ありの動きの分かるところに線を引く。

③ 学習定着のための工夫

・文章構成や内容を読み取れるように、「しばらくすると」「やがて」「すると」「これ」「その」などの言葉から、ありの動きを詳しく読みすすめていく。

・ありの絵を子どもたちと作り、高める段階でそれを動かすことで、言葉の意味や文に書かれていることを確かめ、他のありは、初めのありが帰りに通った道筋を通っていることが読み取れるようにする。

・振り返りでは、毎時間読み取ったことで分かったこと、初めて知ったことなどを書くことで次時につながるようにする。

３　指導の実際

段階	学習活動	教師の働きかけと予想される児童の反応	支援○と評価規準□（方法）
つかむ	1.学習課題をつかむ。 2.自分の考えをもつ。	○ウイルソンは、初めに何をしたか。 ・一つまみの砂糖をおいた。 ○ありは行列を作ったか。 ・「列を作って」とあるから作った。 **＜ありは、どんなふうに行列を作ったか＞**	○黒板に巣や砂糖の絵を描き、課題をつかみやすくする。
考えをもつ	3.考えについて話し合う。	**○**３段落を読み、ありが行列を作るまでにしたことに線を引こう。 ○考えを発表しよう。 ・一匹のはたらきありが、「しばらくすると」だから、あちこち動き回って見つけた。 ・「やがて」と書いてあるから、すぐには帰っていない。 ・たくさんのありが次々と出てきた。 ・はじめのありが巣に帰るときに通った道筋から外れないで、行列を作って帰った。	○３段落を１文ずつ読み、何が書いてあるか考えるように声かけをする。 **○「しばらくして」「やがて」「そして」などから、ありの動きを確かめながら読む。　【活用力】**
高め合う	4.ありの絵を動かし確かめる。	○ありの絵で確かめよう。 **えさを見つけたはたらきありが、やがて巣に帰る。すると、巣の中から次々とたくさんのはたらきありが出てきて、列を作ってさとうの所まで行った。はじめのありが巣に帰るときに通った道すじから外れていない。**	○ありの絵を動かすことで、接続語や指示語の意味を再確認したり、読み取ったありの動きを確かめたりする。 読 初めの実験で行列のでき方を叙述に即して読み取っている。 （発言・ノート）
まとめる	5.振り返りをする。	○わかったこと、思ったことを書こう。	**●板書のキーワードに着目してまとめさせる。**

Ｃ－１　指導案

４　成果と課題

(1)　成果

① 段落と文に番号をつけることにした。児童は、発表するときに段落や文番号を言いながら発表をするので、聴く子も文や言葉に目が向くようになり、「･･･と書いてあるから･･･とわかる」など根拠を文の言葉から考えられる子が増えてきた。

② 接続語や指示語を意識して発問をしたことで、児童の中から、「この指示語は、この文を指しているから・・・だ」と、話せる子も出てきた。また、第三次では、接続後を基に、段落のつながりを考えることができた。

③ 毎時間ふり返りを書くことで、友達の考えを聞き、わかったことを書くことができるようになった。

(2)　課題

① 文を読み取る手助けとして、ありのペープサートを動かし、読み取ったことを確かめることにしたが、本時は、教師が動かしたために、確かな読み取りにはならなかった。児童が動かすことでもう一度文にもどることができ、ねらいにせまることができるものと考える。

② 言葉を意識して読み取れるようになったことが、次の単元でも生かされるようにしなければならない。また、よい考えを全員に広められるように、教師の出場を考え、自信を持ってみんなの前で話ができる力をつけていかなければならない。

③「問い」に対する「答え」がどこにあるのかといった段落構成の大づかみを大切にしながら読み進めることが、第三次の活動を一層効果的にする。今後も意識的に行っていきたい。